



## タンチョウ博士のお話（第17回）

### ○舞鶴と言えば京都府では？

地名で舞鶴まいづると言えば、京都府北部の舞鶴市を思い浮かべるのが普通だろう。名前から連想して、そこにツルがたくさんいたから付けられた名と、誰でも思いがちだ。が、そうではないらしい（答えは末尾）。

しかし、長沼町の舞鶴は、正真正銘しょうしんしょうめい、ツルがいたので付いた名だ。

長沼町には、かつて広い湿地が広がっていた。あの有名な伊能忠敬いのうただたか（1745-1818）の地図を基にした蝦夷図えぞにも、オサツト（沼）とマオイト（沼）がつらなる大きな沼や、南幌町のツル沼なども大雑把おおざっぱながら描かれている。これらの沼や周りの湿地に、ツルがたくさんいたことは江戸時代の記録からもうかがえる。

しかし、“19世紀末”、1890（明治23）年に北海道庁の訓令で「馬追山山麓ヨリ千歳川ニ到ル各沼地ヲ以テ鶴蕃殖地ト相定メ候ニ付テハ」（図1）、その他のトリも含めて一切禁猟とされた。逆に言えば、そこでツルが繁殖し、しかも数が少なくなっていたことの、証明書にほかならない。

では、その後これらの沼はどうなったか。1948（昭和23）年の航空写真では、ポンユーパーリ沼をはじめ、長都沼おさつぬま、馬追沼、ツル沼などまだ健在（！）だった。

しかし、今はすべて幻となり、衣のように沼を包んでいた湿地も消え去った。ツルも幻となったのは言うまでもない。

ところが、“20世紀後半”の1985（昭和60）年6月、長沼町で珍事が起きた。舞鶴地区に住む佐藤さんの水田の、なんとあぜ道で、マナヅル夫婦が巣を造り、2個の卵を産んだのだ。前年には、同じ番つがいらしい2羽を、近くの駒谷さんも目撃していた。残念ながら卵は間もなく失われ、夫婦のうちの1羽も体調を崩し、札幌円山動物園で治療を受けたが死亡した。それが、舞鶴小学校のガラスケースに収まっている剥製はくせいである。成功はしなかったが、野生のマナヅルが日本の野外で営巣した初記録だ。その後、この情報は1999（平成11）年、学会誌に英語で発表され、世界へ発信された。



図1. 100年前（1910年代）の長沼町南部（馬追山と千歳川の間）の沼・湿地帯（地理院5万分の1旧地図使用）

そして“21世紀！”かつて馬追沼のあったところに、遊水地と名を変えて湿地が復活。これは、ツルの再来を予告する事柄だった。それを素早く感じた地元の人たちが、ツルを呼び戻す活動を始め、それに応じるように、今ツルが長沼町の空を飛んでいる。こうした復活劇の進行に、自然と人間との不思議なかわりを見る思いがする。

さて、最後に舞鶴市の地名の由来に触れておこう。確かにツルもいたかもしれないが、そこにあった田辺城がしやうの雅称（別名）が舞鶴城ぶかくじやう。同名の田辺城がほかにもあるため、改名して正式に舞鶴城に。

その後町村名制定の際に城にちなんで地域名も舞鶴へ、という次第。蛇足ながら、舞鶴城を雅称とする城は、九州の福岡城をはじめ全国に16城ほどある。（文：正富宏之）